

本との 出会いを 楽しむ

第31回

編集長の本棚

「心が喜ぶ本」

米谷 明子

弘前大学教育学部幼稚園教員養成課程卒業。数社の出版社を経て、2007年(株)ベネッセコーポレーション入社。現在、『たまごクラブ』『ひよこクラブ』統括編集長。『妊活たまごクラブ』編集長。(株)ベネッセクリエイティブワークス雑誌ムック制作局局長 兼務。



今でこそ、編集という本に関わる仕事をしていますが、私が弘前大学の学生をしていた35年前、実は大学の図書館に行った記憶がまったくありません。漠然とした期待を持って大学生になったものの、自分は何をしたいのか、何をを目指したいのかわからない。コンパに行ったりサークルに入ったり、一見楽しそうにはしていましたが、大学の中に自分の居場所があるような、ないような…。

そんな私が唯一、一人で夢中になれて好奇心をかきたてられた場所が、当時土手町にあった大型書店でした。高校生の時から愛読していた投稿雑誌『ビックリハウス』（現在休刊）が唯一買える場所。編集部を通じて、投稿者同士で手紙をやりとりしたこともありました。その中の一人は、当時のペンネームのまま放送作家になられていて、テレビ番組のテロップで今もお名前を見かけます。

また、『離島情報』という雑誌を店頭で偶然見つけた大学2年時は、いても立ってもいられなくなり、弘前から沖縄の離島の民宿に押しかけて、アルバイトで夏の数カ月間滞在しました。離島という言葉も、場所も一度も考えたことはありませんでしたが、本を見つけた瞬間に「行く！」となったのです。

本はいつでも私にとっては「出会ってしまう」もの、そして行動を突き動かすきっかけになるものだと思います。

意図せず出会ったという意味では、高校の英語の先生から「米谷はいつか、この本を読んだらいいよ」とプレゼントされた本があります（『こころの旅』）。

高校生のときは、内容にあまりピンと来ていませんでしたが、人生の節目で読むたび、「人生は、旅をしているようなもの。自分の心が喜ぶ方向に向かえばいい」と、その時々で、私の背中を押してくれる本です。

最近になって、先生はなぜ、この本を私に選んでくれたのかな？と思うことがあります。居場所を求めてふらふら旅をしそうな私の未来が見えていたのかな？と。先生のおかげで、選書は誰かを思う行為だと今になって思い至りました。図書館も、当時そういう視点で行っていたら、また違った本との出会いがあったかもしれません。

無理して探さなくても、人生でいつかきっと出会ってしまう本（人も）がある。大学生の皆さんには、焦らず、自分の心が喜ぶ道に進んでもらいたいと思います。

（よねや あきこ）

「こころの旅」
神谷美恵子 著

143
Ka39

和図書（第1書庫2～5層）